

# 瀬戸茶入と銘に関する一考察

—「大正名器鑑」所載の茶入について—

神崎 かず子

## はじめに

銘とは広辞苑によると 1 漢文の文体の一。金石・器物などに刻み、またはしるして、物事の来歴を述べ、功績をたたえる文。毎句の字数を同じくし、韻をふむ。2 器物に製作者の名を刻み、または記したのもの。3 茶・酒・菓子などに特別につけた名称。また、名のある上等のもの。4 自分のいましめとする語句。と説明されている。<sup>(注1)</sup>

一方、茶道具につけられた銘はこれらから転じて器物の特徴などによってつけられた愛称的固有名詞をいう。<sup>(注2)</sup>これは作者・所蔵者の名によるもの、形状によるものなどさまざまな性格を持っており、さらに命銘のいきさつや時代、または命銘者の個人的な思いやそのときの状況なども加わって、複雑なものになっているのが現状である。しかし現在「銘」と呼ばれているものについて、本来的な意味での「銘」すなわち特別な意識を持って付けられたものと、所持した人の名前などがそのまま固有名詞化したような呼び名、すなわち呼称銘とはこれを区別して考える方がその性格を理解しやすいと思われる。<sup>(注3)</sup>

さて、今日に伝世する茶入であるが、これらは唐物茶入、瀬戸茶入、国焼茶入そのいずれも銘を持つものが多く、なかでも名物と呼ばれるものになると伝来や銘の由来に関する資料は少ない。幸いにして436点の茶入が取り上げられている「大正名器鑑」<sup>(注4)</sup>(以下名器鑑と略す)には、茶入そのもの以外にも付属品や過去に掲載された文献が詳細に記載されており、瀬戸茶入はその内の251点を占めている。そこで小稿はこの資料をもとに、伝世する瀬戸茶入の周辺を銘に関して整理し、その性格や命銘の傾向をみてゆこうと考えるものである。なお銘の由来に関する記述は、添状などの記録によってそれが根拠になるであろうと考えられるものと、著者である高橋義雄(箒庵)氏の個人的な見解によるとと思われるものとが混在しているが、これらの茶入をすべて実見された高橋氏の資料として記述はそのまま取り扱うこととする。

## 1 茶入と銘に関する研究

茶の湯が成立する以前の茶入の記録は徳川義宣氏によって詳細に検討された。<sup>(注5)</sup>それらの記録のなかで最も早い時期での銘と思われる記載は『看聞御記』『室町殿行幸記』において指摘されている。前者は永享2年(1430)4月28日付けで「・・・円壺一 号安計保乃・・・」、後者は永享9年(1437)10月の記録で橋立之間のところに「御壺 城入道百貫なすひ」、とある。茶入と考えられる記録が初めて認められるのは14世紀であるが、それ以降15世紀までの文献ではそのほとんどが形状を示すものであるのを考えると、これは特に注目される。その後16世紀に入り茶の湯が流行し始めると、各種茶会記、『茶湯百首歌』『分類草人木』が名物茶入を積極的にとりあげるようになるが、こうした16世紀までの記録に登場する茶入はすべて唐物であったらうと推測されている。

さらに林屋晴三氏は『山上宗二記』(1588)をはじめとするいわゆる茶道具名物集を検討され、<sup>(注6)</sup>遠州の時代には唐物茶入の舶載が途絶えたことによって、瀬戸茶入・国焼茶入を加えた新しい名

物が選定されていくという時代背景を指摘された。そして『玩貨名物記』（1660）から松平不昧の『古今名物類聚』（1797）『瀬戸陶器濫觴』（1811）、同時代の草間直方の『茶器名物図彙』、さらには現代の名器鑑にいたるまで、その間に行われた瀬戸茶入の編年について問題点を整理し指摘された。

また赤沼氏は天文六年～慶長十年（1537-1605）の茶会記を検討された。そのなかで銘のある茶道具のうちもっとも多く記録が残されているのは唐物茶入であり、それに次ぐのが唐物茶壺であることを示された。そしてその銘の傾向は、茶壺が「松花」「翁」などといわゆる言葉自体に意味のあるものがほとんどであるのに対し、茶入はそれ以外にも「新田肩衝」「太鼓茄子」などのように所持者名や器形などが固有名詞化したものが加わり、多様な名称になっていることを指摘された。

さらに島村芳宏氏は茶会記にみられる有銘茶道具を対象に、江戸時代にみられる命銘法の分類を試みられた。ここで茶入の銘法は 1旧所持者名による銘 2伝来地・製作地による銘 3器形・景色による銘<sup>(注8)</sup> 4季節・時期による銘 5事象による銘 6和歌による銘—歌銘— 7漢詩・漢籍による銘 8俳句による銘—句銘— 9禅語による銘 10能楽・狂言による銘 に分類され、各々について詳細に述べられた。

## 2 銘の分類

茶道具と銘に関しては昭和63年秋に茶道資料館の展覧会で取り上げられた。そこでは茶壺・茶入・花入・釜・水指・茶碗・茶杓・香合などを対象に、茶会記と伝世の茶道具について具体的に検討されたのであるが、筒井紘一氏はそこで銘が選び出される基準を以下のように分類された。<sup>(注9)</sup>

- 1 見立て銘<イメージ銘>
- 2 事象銘      a 物語銘      b 謡曲銘      c 歌銘  
                    d 句銘      e 中国故事銘      f 出所・季節銘
- 3 洒落銘、機智銘
- 4 呼称銘      a 所持者による銘      b 墨跡・消息などに与えられた銘

また先にもふれたが、島村氏は江戸時代における命銘法の問題を、茶入・茶碗・花入・茶杓について検討され、次のような分類をされた。

- 1 旧所持者名による銘      2 伝来（出所）地・製作地による銘
- 3 器形・景色による銘      4 季節・時期による銘
- 5 事象による銘      6 和歌による銘—歌銘—
- 7 漢詩・漢籍による銘—詩銘—      8 俳句による銘—句銘—
- 9 狂歌による銘      10 禅語による銘
- 11 能楽・狂言による銘      12 物語による銘
- 13 機知銘      14 洒落銘

これらの分類は茶の湯と銘の関係を考える上で具体的であり、また有効な指針となるものであった。そこで今回はこの成果をふまえて、以下のような項目で分類を試み、名器鑑に掲載された

茶入の銘についてその傾向を考えてみたいと思う。なお名器鑑での茶入の表記は、「漢作唐物肩衝 初花肩衝」「古瀬戸之部 肩衝 鎗の鞘」などとなっており、現在展覧会で表示される「唐物肩衝茶入 銘初花」「古瀬戸肩衝茶入 銘鎗の鞘」とは異なるが、本稿では名器鑑の表記に従うこととする。また「唐物円座」「古瀬戸耳付」「春慶瓢箪」など形状や製作地によるもので、同じ名称のものが複数あると考えられる茶入も何点か含まれており、その取扱いには一考が要されるが、今回はこれらすべてを固有名詞として同等に扱うこととする。

- 1 旧所持者による銘（以前所持した人の姓名、あるいは職名・屋号などを持つもの）  
古瀬戸長谷川肩衝（長谷川宗仁）破風窯豊後口広（阿部豊後守）  
古瀬戸在中庵肩衝（在中庵）ほか
- 2 伝来地・製作地による銘（発見、伝来された場所、生産地などの地名を持つもの）  
古瀬戸浪花肩衝・金華山飛鳥川手三笠山ほか
- 3 作者銘（作人の名前がついたもの）  
春慶十王口・藤四郎肩衝ほか
- 4 形状・景色による銘（形や装飾、釉調による景色などを根拠としたもの）  
古瀬戸成高肩衝・古瀬戸村雲肩衝ほか
- 5 和歌による銘（和歌を根拠としたもの。後添えの歌銘も含む）  
古瀬戸霜夜文琳（古今集）ほか  
「さかしらに夏は人まね笹の葉の さやく霜夜をわかひとりぬる」
- 6 漢詩・漢籍による銘（漢詩文を根拠としたもの）  
薩摩顔回（論語）ほか  
「子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也」
- 7 物語による銘（源氏物語などの一節やそのなかに読み込まれた和歌を根拠としたもの）  
古瀬戸故郷肩衝（伊勢物語）ほか  
挽家胴部に「いとほしたなくて」
- 8 能楽・狂言による銘（曲名や面などを根拠としたもの）  
真中古大覚寺手比久貞ほか  
狂言面比久貞に似ていることより
- 9 出来事による銘（ある事件や行為などによって命銘されたもの）  
破風窯几手撰肩衝ほか  
遠洲の道具振舞の際に取り避けられたことによるもの
- 10 その他（以上のどれにも含まれないもの）  
真中古橋姫手恐ほか  
おそらくこれに及ぶものはないであろう、といった意味かと思われるもの
- 11 不詳

これは命銘法について多数の例を具体的にあたられた島村氏の分類におうところが多い。ただしここでの銘の分類はこれをさらに8つのグループにまとめられるように考えてみた。すなわち

筒井氏が「見立て銘」「呼称銘」「出所・季節銘」として分類されたグループと(1-4)、事象銘」として分類されたものの中から特に文学的な性格を持つもの(5-8)と、それ以外の性格の銘(9-11)である。これは赤沼氏の指摘にもあるが、「呼び名」と特別な意識を持つものとのを区別し、さらにそこから和歌を中心とした文学的な性格をおびる銘についてまとめようとするものである。

### 3 茶入と銘に関する傾向

名器鑑に取り上げられている436点の茶入は高橋氏によって以下のようにまとめられている。

唐物茶入 147点

瀬戸茶入 251点(古瀬戸66・春慶18・真中古40・藤四郎春慶7・後春慶2・金華山51  
破風窯36・後窯31)

国焼茶入 38点

これらの内、複数の銘を持つものは唐物茶入が最も多く、北野肩衝(旧銘烏丸)はじめ29点、瀬戸茶入は山の井肩衝(旧銘稻津・松井・人生)はじめ14点、国焼茶入は薩摩後藤(宿の梅・存外)1点である。また銘が先の分類項目を複合せたものもあり、唐物では漢作茄子利休物相(旧所持者名・形状)など22点、瀬戸は真中古面取引貯(形状・その他=転用)など29点、国焼は祖母懐絃(製作地・不明)など6点あげられる。さらに1つの銘に対してその根拠となるものが2つ以上あるものは、唐物では漢作豊後茄子(旧所持者名・伝来地名)など2点、瀬戸は金華山玉柏(景色・歌銘)など5点あり、国焼にはこの例はみあたらなかった。これらの項目はすべて1つずつ数え上げて分類を試みたため、合計件数が名器鑑の掲載点数とは一致しないが、その結果は下記の(表1・2)となった。

#### 1 瀬戸茶入と唐物茶入・国焼茶入

(表1)

	分類項目	唐物茶入	瀬戸茶入	国焼茶入
1	旧所持者による銘	99	52	1
2	伝来地・製作地による銘	23	16	11
3	作者銘		14	1
4	形状・景色による銘	52	102	12
5	和歌による銘	11	88	15
6	漢詩・漢籍による銘	2	1	3
7	物語による銘	1	7	
8	能楽・狂言による銘		3	1
9	出来事による銘	3	4	
10	その他	9	11	1
11	不詳	2	3	1

左の(表1)から読み取れるのは以下の通りである。すなわち、唐物茶入においては旧所持者名による銘が最も多く、これを中心とした呼称銘他(1-4)が全体の8割強という大きな割合を占める。これに対して瀬戸茶入・国焼茶入はそれが5割強に減少し、かわって和歌をはじめとする文学的な背景をもった銘(5-8)が3割~4割に増加している。

次いで瀬戸茶入について窯分ごとに分類を試みると下記のようになる(表2)。なおこの瀬戸茶入の窯分については陶祖藤四郎伝説をふまえた不昧の『瀬戸陶器濫觴』によるものであり、現在まで瀬戸茶入の編年に強い影響を及ぼすものでもあるので、以下に簡単にまとめておく。

古瀬戸・・・元祖藤四郎の作品

春慶・・・・・・ “ 剃髪後の作品(法名春慶)

真中古・・・二代目藤四郎の作品  
 藤四郎春慶・・・ 〃 剃髪後の作品（法名春慶）  
 金華山・・・三代目藤三郎の作品  
 破風窯・・・四代目藤三郎の作品  
 後窯・・・利休時代・織部時代・作人の作品

これは江戸後期に考察された瀬戸茶入の編年であり、13世紀から16世紀までの約300年間を  
 実際の茶入の比較によって推定したものである。その根拠は陶祖伝説を受け入れたものであり、  
 窯や作人の実体に即したのではないという点において問題が残されている。<sup>(注1)</sup>

(表2)

	分類項目	古瀬戸	春慶	真中古	藤四郎 春慶	後春慶	金華山	破風窯	後窯
1	旧所持者による銘	32	2	4	1		7	4	2
2	伝来地・製作地による銘	6	1	2	1		5	1	
3	作者銘		10	4					
4	形状・景色による銘	21	13	16	3	1	16	13	19
5	和歌による銘	16	2	15	2	1	25	17	10
6	漢詩・漢籍による銘				1				
7	物語による銘	1					2	2	2
8	能楽・狂言による銘			1				2	
9	出来事による銘	1		2				1	
10	その他	2		5			2	2	
11	不詳	1	1				1		

ここでは春慶・藤四郎春慶・後春慶など点数の極端に少ないものもあって、傾向をみるための  
 資料として十分とはいえないが、そこを強いていうならば(表1)同様のものが認められると思  
 われる。すなわち古瀬戸・春慶と真中古・藤四郎春慶・後春慶・金華山・破風窯・後窯では、呼  
 称銘他の占める割合が次第に減少しながら歌銘などが増加している様子がみられるのである。

## 2 命銘の時代的傾向

次に命銘者が確認・推定できるもので17世紀までについてまとめることとする。ここでは添状  
 などの付属資料を根拠とする以外にも、挽家・内箱(二重箱でない場合は箱)の書付と名物集な  
 どのによる伝承も加えてそれを命銘者と考えることとした。この方法によると、名器鑑所載の436  
 点の内、唐物茶入55点・瀬戸茶入189点・国焼茶入28点の合計272点についてこれらを資料と  
 して取り扱うことができることとなる。以下に時代をおいて命銘者をまとめる。

15世紀・・・足利義政

16世紀・・・武野紹鷗・豊臣秀吉・千利休

16-17世紀・・・後陽成天皇・古田織部・細川幽斎・細川三斎・小堀遠州・伊達政宗・加藤  
 楓庵・佐久間真勝・佐久間不干斎・江月宗玩・松花堂昭乗・金森宗和

17世紀・・・後水尾天皇・小堀宗慶・小堀正恒・小堀権十郎・小堀十左衛門・片桐石州・  
 松平正信・阿部正武・前田利常・船越永景・翠巖宗眠・茶屋宗古・朱舜水

これらをこれまでの分類に従って表にすると以下ようになる。(表3)

(表3)

	分類項目	15世紀			16世紀			16-17世紀			17世紀		
		唐物	瀬戸	国焼	唐物	瀬戸	国焼	唐物	瀬戸	国焼	唐物	瀬戸	国焼
1	旧所持者による銘						10	19	1	5	5		
2	伝来地・製作地による銘						1	8	7	2	5	1	
3	作者銘				1			6					
4	形状・景色による銘	4			2	4	13	53	7	4	12	2	
5	和歌による銘	1				1	10	54	8	2	15	2	
6	漢詩・漢籍による銘							1	2	1		1	
7	物語による銘							3			1		
8	能楽・狂言による銘							2					
9	出来事による銘							4					
10	その他						1	2		1	2		
11	不詳				1			2	1		1		

これらの資料のうち遠州が命銘に関わったと思われるものは7割近くを占めた。したがって16-17世紀の欄に示された銘の分類はほぼそのまま遠州の銘の世界であるともいえる。しかしその内訳は形状・景色による銘と和歌による銘が同率となっており、そのことは銘の内容を検討する際に注目されるであろうと思われる。

#### おわりに

このように銘について資料整理を試みてくると、大まかなところである傾向が認められた。それはすなわち、林屋氏がいわれるところの、唐物茶入の不足によって取り上げられた和物茶入と銘の関係である。唐物茶入は14世紀に輸入されはじめ、15世紀頃から賞翫が始まったと考えられるが、その頃からわび茶が成立し流行した16世紀までの時期と、遠州によって瀬戸茶入・国焼茶入が取り上げられた16-17世紀では命銘法に変化が認められたということである。これはすなわち遠州をリーダーとした江戸初期の武家の茶風であり、それが歌銘を中心とした新しい銘が意味するところでもあった。瀬戸茶入がその大きな部分を占めることはいうまでもなく、こうした王朝文学を背景とした茶風の成立について今後の研究成果を待ちたいと思う。

小稿をまとめるにあたり下記の方々から貴重なご教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

檜崎彰一、島村芳宏、山田真三、仲野泰裕、野末浩之（敬称略）

注1 『広辞苑』第二版 岩波書店 1979

注2 『原色茶道大辞典』 淡交社 1976

注3 銘について呼び名的な性格をもつものがあることはよく指摘されるところであるが、『茶の湯の名器—由来と銘—展（茶道資料館・1988）で赤沼多佳氏はそれについてふれられた。赤沼多佳「茶道具の由来と銘—室町・桃山時代の様相—」

注4 高橋義雄『大正名器鑑』第一編～第五編 大正名器鑑編纂所 1927-28

注5 徳川義宣「茶入考 序説」『金鯨叢書』第17輯 徳川黎明会 1990

注6 林屋晴三「茶入の賞翫」『茶道聚錦』第10巻 小学館 1986

注7 注3文献と同じ

注8 島村芳宏「江戸時代における銘の展開—茶入・茶碗・花入・茶杓を中心に—」『茶の湯の名器—由来と銘—』茶道資料館 1988

注9 筒井紘一「茶器—銘とその由来—」『茶の湯の名器—由来と銘—』茶道資料館 1988

注10 分類項目を複合させた銘は、唐物・国焼では唐大海・高取耳付など製作地と形状を併せたものが多く瀬戸では春慶文琳など作者名と形状を併せたものがほとんどであった。

注11 注6文献と同じ。